たるすなはちあさみどりなるうすやうに、えんなる文をもてきたり、みれば、

いかにしていかにしらましいつはりをそらにたゞすの神なかりせば、となん、御けしきはとあるに、めでたくも口おしくも思ひみだるゝに、なをよべの人ぞたづねきかまほしき、○下略

〔安齋隨筆後編〕嚏のマジナヒ　嚏クサメの事也、俗にクシヤミと云、凶事也とてマジナヒをする事あり、徒然草に、クサメ〳〵と云てマジナフ事見えたり、クサメと云ふは、ハナヒル事にはあらず、ハナヒル時のマジナヒ詞也、又下賤の人は、ハナヒル時マジナヒ也とて、クソクラヘと云、拾芥抄に嚏時の頌に休息萬命、急々如律令とみえたり、休息萬命をクソクマンミヤウとよむを誤り傳へて、クソクラヘと覺えたがへたるものなるべし、

〔二中歴九呪術〕鼻嚏時誦

休息万命急々如律令

〔松屋筆記一〕鼻曳時の頌

同書○眞俗雜記問答抄イの卷に鼻曳時ノ頌如何、伏息万命、急々如律令云云、與清按に、拾芥抄上卷諸頌部に、嚏時頌、クサメノトキノ事、休息万命、急々如律令、クサメト云ハ是也と見ゆ、奥義抄下之中卷には、はらへするをり、はなひるをもいむなどいへり、

〔松屋筆記六十四〕噴嚏くさめ

新撰字鏡連字部に、噴嚏波奈比留云々、倭名抄鼻口類部に、玉篇云、嚏丁計反、噴鼻也、和名波奈比流云々、袖中抄廿の卷、となりにはなひる條に、

いでゝいかん人をとゞめんよしなきに隣の方に鼻もひぬかな、與清曰、古今の俳諧歌也、顯昭云、はなひるは何事にもよからぬ事也、年始にもはなひつれば、いはひ事をいひて祝ふ也、されば人のものへいかんずるはじめに、隣の人のはなひんを聞ても、くすしからん人は立かへるべき也、毛詩には、